

オディロン・ルドン「ヴィオレット・ヘイマンの肖像」

（パステル 縦72センチ 横92・3センチ 1901年 アメリカ、クリイブランド美術館）

横顔の画家ルドン。例えば石版画集『聖アントワーヌの誘惑』では、「神よ助けたまえ」と呟く聖人の謹厳な横顔が、闇と光明との境をくつきりと刻む。若き仏陀へも変貌するその横顔は、女性の姿となつては『神曲』のベアトリーチェ、溺死するオフエーリア、『神々の黄昏』のブリュンヒルデ、さらにはジャンヌ・ダルクなど、芸術上・歴史上の人物に仮託され、次々に変奏される。

20世紀に入ると、家族や知人の横顔も頻繁に描かれるようになる。息子アリや病後の回復期にあるルドン夫人。その伏し目がちで寡黙なたたずまい。そこには観客に挑みかかってくる、見すくめるようなまなざしなど存在しない。ルドンの眼球は、視線を躲し、回避する。

その代わりに我々を見つめ、心の中まで覗きこむようにして押し黙っているのが、ルドンの花だ。時に戦慄を覚え、時にどきまぎさせられるほどに生々しい霊が密やかに息づいている。本作では、花々はモデルの脳裏に浮かぶ幻想とも、その沈黙の会話の相手ともつかず、妙齡の女性の精神を証するがごとく、画家のパステルと画面との接点におのずと生まれ、画面に咲き広がる。1893年にルーヴル美術館に収められたピサネッロの「デステ侯爵婦人の肖像」を彷彿とさせるこの肖像は、また同時代の藤島武二の「蝶」（1904年）とも、遠く遙かに共鳴している。